

しかしこの危険な路を、最近なものかの通った形跡が、
たった一カ所だけがあった。

ふと見ると向こうのワタスゲの草むらに、なにか黒いものがひっ掛かっている。ホームズはそれを取ろうとして、腰のあたりまで泥の中へはいりこんでしまった。私たちがそばにいなかったら、いつぞやの小馬のように彼は永久にこの泥沼に吸いこまれていたにちがいない。それでも彼はその黒いものだけは、しっかり手に握って高くさしあげていた。見るとそれは黒い古靴の片足で、なかに「トロント市マイヤース靴店」というマークがついていた。

「沼の中へ落ちたかいたがあったよ。これはヘンリー卿がロンドンでなくした靴だ」ホームズがいった。「
」が逃げながら投げこんだのだね」

「そうさ。あとを跟^つけさせるため犬にかがせてからも、捨てないで持っていたんだ。いよいよだめだと知って逃げだすとき、やはり手にしていたが、ここまで来てもう用はないと投げすてたんだ。

これで見ると、ともかくもここまでは逃げてきたことがわかる」

しかしここまで逃げてきて、さてそれからどうなったか、どうにでも推測はできるが、はたしてどうなったか、その真相は知るよしもない。足跡のくぼみもすぐに盛りあがっては消えてしまう軟かい泥なのである。

しかしこの危険な路を、最近なものかの通った形跡が、たった一カ所だけがあった。ふと見ると向こうのワタスゲの草むらに、なにか黒いものがひっ掛かっている。ホームズはそれを取ろうとして、腰のあたりまで泥の中へはいりこんでしまった。私たちがそばにいなかったら、いつぞやの小馬のように彼は永久にこの泥沼に吸いこまれていたにちがいない。それでも彼はその黒いものだけは、しっかり手に握って高くさしあげていた。見るとそれは黒い古靴の片足で、なかに〈トロント市マイヤース靴店〉というマークがついていた。

「沼の中へ落ちたかいがあったよ。これはヘンリー卿がロンドンでなくした靴だ」ホームズがいった。「
「 が逃げながら投げこんだのだね」

「そうさ。あとを跟けさせるため犬にかがせてからも、捨てないで持っていたんだ。いよいよだめだと知って逃げだすとき、やはり手にしていたが、ここまで来てもう用はないと投げすてたんだ。
これで見ると、ともかくもここまでは逃げてきたことがわかる」

しかしここまで逃げてきて、さてそれからがどうなったか、どうにでも推測はできるが、はたしてどうなったか、その真相は知るよしもない。足跡のくぼみもすぐに盛りあがっては消えてしまう
軟かい泥なのである。

コナン・ドイル『バスカヴィル家の犬』延原謙訳・延原展改訳 新潮文庫
〔但し一部白塗り・鍵括弧を山括弧に変更〕

探偵は犯人の残した形跡〔trail〕を追う存在だ。だがその一連の形跡のさきに、真の犯人がかならず寝息をかいて待ちわびているのだろうか。探偵が見つけた形跡がある容疑者を指し示すとして、しかしそれは、彼とは別の真犯人が、彼に疑いを向けさせるために用意した姑息な罠ではなからうか。まふと探偵は、真犯人の手のひらで動かされ、偽の容疑者を告発してしまう。彼もまた真犯人に操られていて、なぜだか自供してしまうのだ。

この操りに探偵が気づいたとしよう。容疑者と思われていた男はおとりで、実はほんとうの犯人が別にいるのだと。しかしそして「真犯人」にたどり着いたとしても、彼もまた操られたスケープゴートかもしれないのだ。探偵の推理は構造的に困難を極めていく。

むしろその逆もいえないだろうか。事故死に見せかけられた殺人だと探偵が看破したものは、実はほんとうに事故でしかなかったのだ。もともと推理の成立など困難なのだから、どの段階の推理もうたがわしいのだ。もはや探偵の推理は、たまたま残っていた状況証拠から彼がでっちあげた妄想の類ではなからうか。

つねに真犯人は、おとりの容疑者を残して逃げ去る。ようやく捕まえたと思ったとたん、それは偽の容疑者になって、真犯人は推理の手を逃れ去る。真犯人とはそういうものだ。「実は、俺と顔も背格好も何もかも同じやつが真犯人で、俺はおとりにされただけなんだよ。信じてくれよ、探偵さん」
「この期に及んで醜い言い逃れを」——真犯人は、真犯人の双子である。

そうと知らずに、探偵は〈永久にこの泥沼に吸いこまれて〉いくだろう。推理とはいったん始めれば泥沼で、探偵にとってはそれが生業なのだ。「沼の中へ落ちたかいがあったよ。」

東京藝術大学 第67回卒業・修了作品展覧会

2019年1月28日から2月3日

毎日10時から17時 およそ50分でループ

暗所・狭所にお気をつけください／周りにご配慮ください

大岩雄典

Trailer〔トレイラー〕

